

『障害を持つ息子よ。そのままがいい』

RKB 毎日放送東京報道部長 神戸金史先生

2019・6・6

公開講義にお呼びすると、そのゲスト講師が、テレビに出たり新聞に出たり……という巡りあわせがこのところ続いておりますが、まさに本日、カンちゃんこと、神戸先生が、毎日新聞の「ひと」欄に載っています。どういうわけで「ひと」欄になっちゃったのかというのは——なっちゃったというのは変ですが——あとでお話をさせていただこうと思います。

日本医学ジャーナリスト協会賞に、メディアミックス部門というのを初めてつくりました。その前に第1回の大賞をお取りになりました。

ほかのキャンパスにも人がいらっしやるし、それから web で見ている方もおられますので、最初にお顔を——。

○神戸 わかりました。なかなか緊張しますね。

○ゆき じゃあ、自己紹介を兼ねながら…。

○神戸 改めまして、神戸です。きょうはよろしく願います。

福岡の放送局に勤務していますが、もともとは新聞記者です。高校時代に新聞記者になろうと思って、いろんなものを読み始めた中に、ゆき、由紀子さんのお名前がありました。高校時代からお名前を存じ上げている方と、まさかこうやってお会いできるとは…。生まれは関東ですが、毎日新聞に入って九州に着任して、それから九州の生活が長いという状態です。今は、たまたま単身赴任で東京に来ていまして、TBS と一緒に仕事をしています。

福岡の放送局・RKB 毎日放送というところで、引き続き「記者」と名乗っているのですが、本当は管理職で、編集長をやったりして自分で取材に行けないわけです。何のために転職したのかわからないよと思いながら、デスク編集長をし、報道部長をし、テレビ制作部長をするというようなことをやってきまして…。こんなことをするために転職したのではないという気持ちから、ときどき取材に行つてドキュメンタリーをつくるという生活をしてきました。

○ゆき 賞をおとりになつていらっしやいます。。。

○神戸 放送の世界では大きな賞が3つ、もしくは5つあります。芸術祭大賞というのと、ギャラクシー賞というのと、放送文化基金賞です。そのうちの一つの放送文化基金賞に、3月に放送したラジオ番組を応募したところ、最優秀賞ということになりました。うちの会

社としては 41 年ぶりの受賞ということで、大騒ぎになっております。TBS ラジオと RKB ラジオの共同制作という形をとってしまして、TBS ラジオは初受賞です。ですので、大騒ぎになっております。

賞を取ったというのはありがたいことなのですが、基本的には相模原の障害者殺傷事件をベースにした記者活動なので、実は「万歳、万歳」と言っているような話ではもちろんないのです。

私自身は、障害を持っている子供の父親として生きてきたわけですから、全く福祉の世界の専門家でも何でもないのです。そういう中でできたので、福祉の世界に詳しい方から見ると、「素人が何を言っているんだ」と思われることもあるのではないかと少し心配をしていますが、「障害を持っている子の父親が何を考えてきたのか」、たまたまそれが記者だったので、「どんな表現をしてきたのか」というところを見ていただけたらと思っています。

『TBS NEWS』というサイトがありまして、普通に「TBS ニュース」と引くと、こんなふうに出てきます。社会・政治とか、ニュースがそれぞれあるのですが、「特選」という所を見ていただけたらと思います。スマホで見ると「おすすめ」となっている場合もありますが、「特選」とか「おすすめ」というのは、時間にかかわらず掲載し続けますというコーナーです。普通は1週間経つと、ニュースというのは消えてしまうのですが、「特選」は期限を切っていません。

ここには、5月6日に『news23』で 15 分ほど、私がつくったものがあります。それから、私が10年以上前につくったドキュメンタリーもここに——RKBという会社で違うのですが、TBS のサイトに——「うちの子」というタイトルで1時間番組を5分割しています。タイトルのバックに写っている女性と子供は、私の家族です。セルフドキュメンタリーという珍しいタイプの番組で、自分の家族を撮って自分が番組にしてしまうというものです。ですから、距離間が難しいといえば難しいです。家族だから親しいものという前提でつくってしまうと、多分失敗するものですし、家族を被写体として冷たく見ると、非常に冷たい番組になって失敗するという…。バランスがちょっと難しいのですが、そういう番組を 2006 年につくって、全国放送もしております。

これは、自閉症という障害がどんな障害なのかを、見てわかるようにしてみたいと思って、家族を撮ったものを中心にして1時間番組にしたものです。私の家族と、成人のこの男性と、ブランコに乗っている子…この3人の、子供と母親の物語です。このドキュメンタリーを見た人は一様に、「お母さん、すごいね」とおっしゃいます。一様に、「父親が存在していない」と言うのです。ほとんどの家庭では、父親がだめです。私も含めてですが、全然だめです。「お母さんがどれだけ背負ってしまっているのか」ということが出ている番組でもあり、ここに出っていますが、無理心中の現場をズーッと歩いてみたら、自閉症の子がいる世帯がかなりあるということに気づいたので——これは当時、毎日新聞で私が新聞記者として書いた記事ですが、テレビとしても取材をしております。

これをつくっていく中で、「障害がありつつも、子供がゆっくりとだけど確実に成長していくということは、親の喜びでもある」と思っていた…。結論を決めてつくった番組ではなくて、同時並行みたいな感じで作る中で、「そういうことなのかな？」と思いながら、「こう思ってもいいのかな」と思いながらつくった番組です。

ちなみにこの中で、あとで見ただけいたらうれしいのですけれども、障害を持つ子のお母さんたちが集まって話しているシーンがあるのです。そこでは、「この子を授かって本当によかったと思っているのです。障害のある子を授かって本当によかった。心からよかったと思っている」と、涙ながらにおっしゃっているお母さんたちがいらっしゃいます。そして、みんながうなずいているのです。僕はその取材をしたとき、全くそう思っていませんでした。全く思っていなかったので、「ないほうがいい障害を、あってよかったとは思えない」と思っていました。

2005年から2006年にかけてなので、そのころ子供はまだ6歳7歳のころだったのですが、自閉症という障害がよくわからないまま子供が成長してきている。父親としては、どうやっていいのかもわからない。コミュニケーションがうまくとれない障害なので、どうすればいいのだろうと思っていました。そのときに先輩たちの親が、「障害は個性だから」と何度もおっしゃったのです。「ないほうがいいものを、個性と言わないでしょう」と僕は言っていました。そういう中でそのお母さん方に会って、「この子を授かってよかったです。心からそう思っています」という言葉を、取材したときでさえそう思っていなかったのですが、この人たちが本気で言っているのはわかりました。ですから番組の中で取り上げています。でも、「私はそう思っていなかった」というのがこの当時ですね。

ただ、この番組の中でも、「ゆっくりとでも子供は成長していくのだ」ということを実感することが度々ありました。悲観して無理心中してしまうお母さんがいる中で、そうではなくて、「この子たちは、障害がありつつも成長していく」ということを知ってほしいと思ってつくった番組です。ただ親として、「この子の障害があっていいんだ」とは全く思っていなかった当時のものであります。

今、うちの子は20歳になっていますけれども、これをつくった当時は7歳とか6歳でした。自閉症という障害は、見た感じですぐにわかる障害ではなくて、成長していく過程でわかってきます。うちの子で言うと、1歳になるころに初めて妻が、この子には障害がある可能性があると思い至り、知的障害の本を買い込んできたのです。そのころ、赤ちゃんを抱っこしても目が合わないというのは、僕も思っていました。それから、腰の座りが遅いとか、歩き出さないとか、しゃべらないとかいうのもありました。でも、そういうのは人によって違うけれど、だんだんだんだん、いずれ追いつくだろうと私は思っていたので、妻が知的障害の本を買っているのを見て、怒ってしまったのです。

「子供の成長は人それぞれなのに、一喜一憂してどうするんだ。こんな本は読む必要はない」と僕は言い切ってしまうました。それは、多分僕の中で、「この子に障害があるかもしれない」ということを認めることが全然できずにいたのだと思うし、「なかったらいいな」

と知っているし、「多分、ないんじゃないか。そこまで心配する必要はないんじゃないか」と根拠もなく思おうとしていた。そのときに、妻は現実を見ようとして本を買っていた。その妻に対して、僕は非常に失礼なことを言っているわけです。これは、「いまだにあのときのあなたは許せない。むかつく」と言われながら、「すみません」という感じで、一生頭が上がりません一つの理由になっております。

そのように、妻の置かれた状況は、夫の支えがないまま子育てに苦しむというものでした。意思疎通がうまくできない障害なので、どうやったらこの子に、親はこう思っているということを伝えられるのだろうか？ ここでは走ってはいけないということを、どうやったら伝えられるのだろうか？ 言葉というものがあるということを、どうやって教えたらいいのだろうか？ そういうことに妻は苦しんでいました。

カードをいっぱい書いたのです。パウチを買って、家でハンディーパウチみたいな感じで名刺サイズのをパウチにするのです。こういうものです。パウチでカードをつくったりしました。そのシーンもこの中にはいっぱい出てきますが、例えば手書きで物の絵を書いたり、写真を撮ったものをプリントして張ってみたり、ヤクルトを写真で撮って、その下に「ヤクルト」と書いて、これを見せて、「どれを飲みたいのか？ これか？」とか…。耳は聞こえているのですが、発することができないという障害の程度だったので、いろんなカードを見ながらやっていました。

そして、例えば車に乗る、幼稚園に行く、車に乗って幼稚園から帰る途中に買い物に行くとかを、時間ごとに並べてみたりとか…。そういうことをする中で、「これには意味がある」と子供がだんだん気づき始めたのです。そして、そこに書いてある「ヤクルト」という片仮名を見て、「これは、これと一緒にだ」ということに気づいたのです。つまり、文字という概念が、多分6歳ぐらいになって初めて入ったのです。文字というものがあると…。自分でそれを書いてみる。そうしたら、お母さんがヤクルトを持ってきてくれた。「ああ、伝わるんだ」と思ったと思うのです。

だから、絵・写真という視覚から入って、それから文字に行って、そうやってコミュニケーションを取るためのツールが自然にだんだんふえてくる。それを引っ張り出すために、カードをいっぱいつくっていました。結果的に文字でやり取りができるようになれば、カードはもういらないので、今は全くつくっていません。ただ、1,000枚というレベルでつくってました。大変な作業だったと思います。そういうように、障害のある子は視覚優位でものを考えることが多くて…。聴覚優位の人でも少ないながらもいますけれど、目で見たものですべてを考えるとという子は結構多いです。特に自閉症の子は、そういう子が多いです。

さっきも言ったのですが、自閉症のある子は、頭の中で情報の整理がうまくつかない子が多いのです。想像力の障害でもあります。例えば、私が皆さんにこうやって手を振ったときは、皆さんには手のひらが見えていると思います。皆さんが私に手を振るときも、私には手のひらが見えますが、自閉症のある子は、かなりの割合でこうやって(手のひらを自分に向けて)手を振ってしまいます。皆さんが手を振るときは、(私には)手のひらが見えて

いる。自分が手を振るときも、(皆さんに)手のひらが見えている。これが普通です。でも自閉症のある子は、自分が手の甲側でないと、相手に手のひらが見えないということがわからないのです。

でも健常の子は、10カ月ぐらい、1歳ぐらいで、バイバイしたらバイバイとできます。なぜできるかというと、手のひらが向うに向いているということが自然に理解できているからです。相手に手のひらが見えているということがわかっているからです。ここがわからないのが、自閉症の根本的な障害なのです。「想像力の障害」と言っていると思います。

100人に二人程度生まれてきますが、程度はいろいろです。多分この中にも、自閉的要素の強い人はいらっしゃるだろうと思うし、私自身も多分そうなのです。徳川家の系図を書いて喜ぶ子というのは、かなり特殊だと思うのですが、僕は小学校1年生・2年生・3年生ぐらいまでは、そんなことばかりやっていました。楽しくてしょうがなかったのです。車のカードが大好きとか、お菓子のおまけカードが大好きという子もいるではないですか。小さいころは、それが大好き大好きで、それだけで世界は完結するぐらい、ほかのことはいらぬというぐらい好きだという人はいっぱいいると思うのです。

でも、だんだん社会性を獲得する中で、そういうのは陰に隠れてしまうのですが、その程度の強い子は、もっと深く深く入っていく場合が多くて…。そういう人で、障害者ではないですけど自閉的傾向の要素が強い人というのは、よく「鉄オタ」とか言われていますよね。別に、鉄道オタクの人が障害者と言っているわけではなくて、こだわりを持つというのが自閉症の大きな特徴なのです。そのこだわりが、社会生活を送るに当たって不便になってしまうほどになると、「障害」になってきます。ただの鉄道オタクは、障害ではありません。ただ、「鉄道があれば、ほかの趣味は一切いらぬ」と言ってしまう人は、結構いるわけですね。

結構濃度が強いのは、障害者ではありませんが自閉症なのです。私は歴史の濃度が強すぎて、歴史が大好きで、系図が大好きで、何がおもしろかったのかというぐらい好きだったのです。社会性を獲得していく中で、そういう要素が薄れていくものではないかと思っています。ただ、そのとき周りの人は、歴史を好きだという私を、かなり特殊な子として考えていたのだと思います。

これが、車とか鉄道とか歴史ではなくて、「トイレの便器が大好きです」と言ったら、ちょっと変わり者に見えますよね。でも、そういう人がいるのです。トイレが大好きというのは、自閉症の人にはかなり多いです。では、どこに違いがあるかと言われても、よくわからないではないですか。別に、車が好きな子がいたって、トイレが好きな子がいたっていいのではないかと、好きな子からしたらそう言うでしょう。

その辺がさらに強まると、例えば、「このトイレを使わないと家に帰れません」とか…これはこだわりなのです。きょうはお母さんが買い物に行きたいから、ショートカットして車でこっちに行くというのはだめなのです。「このトイレに私は寄ります」と…。もっと強くなってくると、「トイレはすべて、水を流さないでだめです。それより大事なことはないの

す」という人は、ずっとトイレを流していかないとだめで、連れて行こうとするとパニックになってしまう。

○ゆき それが、お坊っちゃんですか？

○神戸 そうです。うちの長男は、そうでした。すべてのトイレで水を流すというのが、うちの子のこだわりだったのです。

ここに、どこかにうまく線を引くというのは難しく、僕らとその障害のある人は、なだらかにつながっている。これが、自閉症スペクトラム(ASD)というものの考え方です。ぴしゃつとは切れないということです。そして発達の度合いによっても変わるので、スペクトラムというのは、グラデーションのように連なっているというふうにイメージしていただけたらいいと思います。「私は一切、そういうこだわりはないです」という人は、一人もいないと思います。私は食べ物でこれが好きとか、これを1週間に1回食べないとだめと決めている人はいらっしやると思います。でも、それで社会生活ができなくなるわけではないですよ。

僕は、そういうこだわりというのは、多分人間らしさみたいなものに関係しているのではないかと思っていますのです。自閉症の障害というのは、広い意味で言うと人間らしさ、人間が人間であること、ロボットではないということです。そこには個性があるということです。そういう問題がかかわっていて、その濃度が強まって、社会よりそっちが大事となってくると、対人問題まで影響してくるわけです。そして、さらに重くなってくると、意思疎通がしにくくなるという問題につながってくるのではないかと。言葉を失ってしまう人もいます。だから今では、「グラデーションのように連なっている」と理解していますが、当時は、本を読んでいるだけでは全く理解できずに、困っていました。それで、放送局に転職したのをきっかけに、子供の映像をベースにして、見てわかる自閉症の番組をつくってみようと思ってつくったのがこれです。ちょっと話が長くなってしまいました。

○ゆき 一昨日、5つの URL を皆さんに送りましたが、あれをクリックしてくださると、すばらしい番組が載っていますので…。

○神戸 その年の TBS 系列の番組では日本一ということになって、全局でかけてもらっています。今回 TBS が、「相模原事件から1周年に当たるときに、何かを社会に対するメッセージとして出したいのだけれど、TBS にコンテンツがないので、RKB のこの作品を借りられないか」と僕に言ってきたのです。それはもう、「いいですよ」ということで、TBS のサイトだから別の会社なので、本来はそういうことをしてはいけないのですが、「いいですよ」ということで公開しました。できたら、どこかで見ていただけたらと思います。

そうやってきた中で、これが相模原事件の起きた3日後に Facebook に書いた文章で、きょう、お手元に配ってあります。あの事件が発生したときには、皆さんもそうでしょうけれ

ど、非常に衝撃を受けまして…。明らかに障害者を狙い撃ちしたわけですよね。私はすぐに TBS に駆けつけて、特番の制作をやっているメンバーたちの様子を見ながら、「ウァー」と思って見ていました。

それは、障害者施設に深夜侵入し、殺傷して逃亡するという、ちょっと信じられない事件で…。そこには明らかに障害者差別というか、障害者の命の軽視という問題が起きているのは間違いないと思ったからです。そして、この人が自首をして、最初に、「障害者は生きている意味がない、価値がない」と供述したと伝えられたことで、これはまさに、うちの長男に刃(やいば)が向けられているようなものであり、大変なことになったと思いました。そして、もうちょっと想像して、もっと怖くなったのですが、これに同調する人は少なからずいるのではないかということです。正直言うとうんざりしながら、「どうしよう?」と思いました。

ネットを見ても、正論で、「そういうことを言うてはいけない」と怒っている人はもちろんいっぱいいました。一方、匿名で、「考え方はわかるよね」と書いている人もかなりいたわけです。怒れば怒るほど、あざ笑う人もふえているなど思っていました。ですので、怒りや憤りは、多分おいしいえさになって炎上するだけだと思ったのです。僕は表現者ですが、サラリーマンでもありますから、勝手に会社の枠を超えて何かをバーンと出して大炎上することは、サラリーマンとしてはとてもふさわしくありません。それは、どの社会でもそうだと思います。記者としては自分の思いをメディアで表現すべきだと思いますが、極めて個人的な感情だったので、どうしようかなと思っていました。

フラストレーションがかなりたまっていた状況で、家に帰って、一人でパソコンに向かって書いたのは――。怒りや憤りではなくて、子供を授かったとき、障害があるとわかったとき、障害なんかなければいいと思ったときから、自分がこの子と過ごしていく中でだんだんと考えてきたことを書いてみようと思って、結果的に 1,000 字ぐらいの文章を 30 分ぐらいで書きました。そして写真を 1 枚つけて、1 回だけ通して読んで推敲しました。そして、そのまま夜中にアップしています。

翌朝、きのうの夜にアップしたなどと思って見たら、物すごいシェアが始まっていたのです。この文章には一切事件のことは書いていないです。でも、今、障害のある子を持つ父親がこのメッセージを発したということは、相模原事件に対するカウンターな言葉だと社会が勝手に受け取りました。それで、どんどんシェアが始まったのです。それは明かにそういう意味だったので、僕はいいと思いました。会社では一応、「朝 Facebook を見たら、きのう書いたのがエライことになっていまして…」と上司に言ったら、「炎上しているのか? 炎上しているのか?」と言われて、「炎上ではないのですが、えらい騒ぎになっています」と言った覚えがあります。炎上ではなくて、共感をしてくれた人がすごく多かったと受けとめています。すごい数のシェアが始まりました。

そのときに、『news23』の仲間が、「神戸さん、これを『news23』で全文朗読したい」と言ってきたのです。これは極めて私的な文章なので、「うーん」と思ったけれど、でも言っ

てきた気持ちはすぐにわかったのです。なぜかというと、報道というのは、「加害者がこう言った」ということは動機に迫る内容だから、もちろん報道しなければいけないですが、しかしそれだけを報道したら、憎悪を拡散するだけになっていくわけです。ですから、被害者の言葉というのが、そういう意味でも必要なのです。ところがこの事件では、被害者は匿名でした。だれが殺害されたのか、けがをしたのかもわからないのです。取材のしようもないのです。結果、加害者の言葉だけが報じられるという、信じられない報道になっていたのです。

これは、僕らにとっては許しがたいことで、障害者の親であること以前に、記者として自分たちが憎悪をふりまくというのは耐えられないわけです。そのときに『news23』の編集長は、「メディアとして、この言葉をカウンターという言葉として社会に出したい」と考えたのだと思います。それはすぐにわかりましたから、「わかりました」と言って、準備を始めて翌日にスタジオ出演しました。これは全文朗読してくれたので、ここでも見ることができます。

それを見たのがこちらの出版社の編集者で、「本を書いてくれ」と言ってきました。びっくりしましたが、事件から3カ月後に何とか出版したのが、先ほど御紹介した本です。だから、結構前なのです。2016年7月26日に事件が発生し、29日に書いた文章で、それを本にしたのが3カ月後の2016年10月26日です。そして事件から2年半、間もなく3年になろうとしているところです。その後、この本も、かなり×××(不明)で、ありがたいと思っていました。それはやはり、植松的な…植松聖という被告が言うようなものではないと思っていたからです。

先ほどちょっと申し上げた、「障害は個性であるとは思いたくない」という考え方は、実はいつの間にか僕の中から消えておりました。何年かかかって、ふと想像したのです。それは、「この子が突然健常の子になったら、どうなるだろう？」と…。それは、この文章の中でも書いています。ここでも、「もし障害を持っていなければ、私たちはもっと楽に暮らしていけたかもしれない」と一番初めに書いていますが、これは当時の気持ちだったのです。それはずーっと思っていました。では突然この子が健常になって、「おはよう」と僕を起こしにきたらどうしようと…。それはそれで、何かちょっと悲しいなと思うようになっていたのです。

なぜかという、この子はこの子なりに成長しているのを、だんだんだんだん感じてきました。妻が苦勞していることも感じてきましたが、一つ一つの成長は、普通の子と同じように喜びであるわけです。これが、何年も経ってきているのに突然健常の子になられても、過去が消えてしまうだけで、それはどうかなと…。過ぎてきた時間は、過ぎてきた時間なりにいいおいしいものだと思うように、だんだんなくなっていったのです。

長男は10歳のころに、甘えることを覚えました。普通の子が自然に感じる一つ一つのことを、あとからあとから後天的に学んでいきます。「甘えたら楽しい」ということに気づいたのです。うまく言葉はしゃべれないのですが、ふとんに潜り込んで抱きつくのです。そんなことは、小さい子は当たり前のようにしているかもしれませんが、うちの子は10歳まで1

回もしたことがなかったのです。でも、何かで知っみたいなのです。何のきっかけはわからないけれど、してみたのです。そうしたら、暖かくて、気持ちがよくて、お父さんもよしよしとしてくれる。「あっ、これっていいな」と思って、それから甘えるようになってきたのですね。

それから、僕が食事などをするのでいすに座っていると、僕のひざの上に座るようになってきたのです。かわいいじゃないですか。「ウオー」と思って喜んでいたのです。そうしたら嫁さんから、「ばかか、おまえは。50になっても、ひざに座らせる気か？ 自分が80のじいになっても」と言われたのです。「そんなことをしていたら、50歳になってもこの子は座るよ。大人になってしてはいけないことは、子供のときからさせてはだめなの。自閉症の子を育てる基本。あなたは全くわかっていないね。ここで甘えることを覚えさせたら、大変なことになるんだよ」と…。

「うわー」と思いました。確かにそうなのです。TPOがわからない、想像力の障害です。だから、「こうしたらいいんだ」「許してもらえた」と思ったときに、それを抜くのは大変なのです。いいと決めたものが、何でだめになったのかわからないので、抜けない。それを抜こうとするために禁止すると、わけがわからないからパニックになるというケースはかなりあります。それを学んだのは、あるとき北海道の特別支援学校の先生が講演に来てくれたそうで、そのときの話の内容だったと、妻は言っていました。

自閉症の子には、目鼻立ちがとても美しい子が多いのです。なぜかはわかりませんが、明らかに多いのです。昔は差別用語として使っていて今は使わないですが、「白痴美」という言葉がありますよね。「白痴美」というのは多分、自閉症のきれいな顔をした子を指したのではないかと僕は思っているのですけれど、言葉がなくなることによって事実が見えなくなってしまう場合が結構あります。うちの子のように、耳が聞こえているのにもかかわらずしゃべれない子は、昔は「啞(おし)」と言われていたのですが、「啞」が差別用語だとして禁止されてから、「聾啞(ろうあ)」という言葉になってしまいました。「聾啞」というのは耳が聞こえない子を中心にしているので、ただしゃべれない子の存在が見えなくなってしまうのです。「白痴美」というのも、同じようなものかもしれません。

とってきれいな子が、北海道の学校にいたそうです。物すごく美男子だった。ただ、コミュニケーションは非常に難しかった。その子が、女性の先生のうなじの髪をサラツとなでるのが大好きだったそうです。サラツと触るだけなので、黙認していたそうです。ところが、卒業したあとに外でやって、痴漢と間違えられて、言いわけもできないので警察に捕まるようになってしまいました。それを繰り返しているうちに、とうとう常習犯として逮捕です。「大人になってしてはいけないことは、小さいころからさせてはだめなんだ」と…。

この話を、妻から聞いた覚えは確かにありました。なるほどと思った覚えはあるのですが、理解できていない父親は、「自分のひざの上で甘えさせる」という一番やってはいけないことをして、「80になったらひざの骨が折れるよ」と言われたのです。「あなたのひざの上でしか御飯を食べなくなったら、どうするんだ」と…。自閉症の子を育てる難しさというのは、こういうところにあります。一度許してしまったものを、「許された」という中で続け

ようとする。とても気持ちがいい、楽しいと思っている。それをやめさせるというのは、とても難しい作業になります。

時間をかけていく中で、程度を持って甘えてくれるようになってくるのです。ひざの上に座ってはだめだけれど、甘えてはだめと言っているわけではないのです。甘えられるようになった子供は、かわいいですね。でも、10歳までそういう要素はゼロだったのです。この子をかかわくと思う要素は、多分いっぱいあったのです。自閉症という障害のことを全く知らないでいたら…。もしくは、うちの子ほどハードな障害程度ではなくて、言語は持っていたとしたら…。この子は多分、いじめの対象になっていたと思います。空気を読めない子ですから。

うちの子もそうですが、通りすがりの女性に向かって「ふとーい」と言いますからね。言語がはっきりしませんが、僕は言っていることはわかるので、こっちは凍りますよ。でも言語がはっきりしないので、向うにはわからないのですけれど、「ふとーい」って…。これは、本当に太っている人を見たときに言うのですが、こっちは冷えるわけですよ。でも想像力の障害であって、「太っているとと言われて、相手が怒る」ということに対する想像力の障害なのです。太っている人を見て、何で太っているとってはいけないのかがわからないわけです。こういう障害なのです。しゃべれる人の場合は、これは大変なことになります。言葉が明瞭だったら、僕らは結構大変です。

普通の学校に行ったときに、知的障害のない子もいっぱいいます。友達に向って失礼な言葉を連発するとか、自分の興味のあることをずーっとしゃべり続けるとかします。「他人は興味がないかもしれない」という想像力に欠けているのです。「自分が楽しいことは、この人たちも楽しい」しか選択肢がなく、「この人たちは、私が楽しいと思っていることを、実は余り好きじゃないかもしれない」と想像する力がない、弱いのです。そうしたら当然、空気が読めない子としていじめの対象になるでしょう。

そういう中で、発達障害の知識を少しでも先生方が持ったり、校長先生が持ったりするのはすごく重要です。その学級の中のいじめの理由がはっきりわかり、対処の仕方もあると思うのです。別に、「この子に障害があるから」と言う必要はないです。この子の特性は何で、何でこういうことを言ってしまうのかということ先生がわかることによって、クラスメイトとのいろんな対応の仕方が生まれてくるのです。それだけでも大きな違いがあると思います。多分、注意もきちんと伝わっていないはずだし、うまく伝えるためにはどうしたらいいかということも、発達障害の知識を持つことで可能になるでしょう。つまり、発達障害の意識を持つと、いじめを一定程度減らすことができると思います。

それから、子供を殺害して、飛び降り自殺をしてしまうお母さんがいるのですけれども…発達障害を気にして、どうしていいかわからず、受けとめられずに、首を絞めて、飛び降り自殺をしてしまうお母さんもいます。実は、さっきの1時間番組では、無理心中の現場を訪ね歩いて、自閉症の子がどれだけいるかというのを実証してみるということもやっています。私の体験では、10件近く訪ねたり取材をしまして、遠方の場合は電話で取材をした

のですが、すべて自閉症の子が無理心中の現場にいたのです。幼児を巻き添えにして母親が死んだ無理心中に、すべていました。それぐらい追い詰められて悩んでいる。どうしていいかわからないのです。

そういう親御さんの助けになるためにも、走り回っている子を地域の人が見たときに、「しつけをちゃんとしろ」と怒るのではなく、「もしかしたら発達障害のある子かな？」と思うだけで、「お母さん大丈夫？ 疲れてない？」と一言声をかけるだけで、そのお母さんはすごく助かるかもしれません。

うちの子の場合は、パニックを起こしている子供を一生懸命なだめているときに妻は、「いい加減にして」と、つい声を出しちゃうわけです。駐車場で寝ころがって、叫んで泣いている子に、1時間も泣き叫んでいたらたまらないから、「いい加減にして」と言ったら、「虐待しているみたい。通報したほうがいいんじゃないか」という声が聞こえたと…。そのとき、妻は泣いていました。「ここまで頑張っているけれど、人から見たら虐待にしか見えない」という状況に、妻は追い込まれていたわけです。

パニックを起こしている子を見た人から、「何であんなに泣かせているんだろう？」とか…。何でもなくて調子がいいときに、どんどん走り回っているんじゃないはずをして回っていると、「何でしつけをちゃんとしないのだろう？」とか言われても、メッセージが全く伝わっていない子だったりするかもしれない。発達障害の子を持っていて、周りの人の認識がない中にある世のお母さんは、それを見て追いまくられています。心身ともに非常に追い詰められている人が結構多いです。

うちの妻もそうでした。2年ぐらい前に、4歳のころですが、「この子の首を絞めてしまうかもしれないと思っていた」というのを、あとから聞いたのです。2年遅れで聞いたわけです。当時、私は新聞記者をしていて、事件をやっていたのに、自分の自宅で殺人事件が起きていたかもしれない。それも、加害者と被害者が家族だという、信じられないことが起きていた可能性があったのに、気づいてもいなかったのです。言えるようになった妻が、2年後に言ったのです。それで、「虐待の現場とか無理心中の現場には、自閉症の子がいるのではないか」と思うようになって、取材を始めてみたということなのです。

そういう中でも、子供はだんだん成長していくのです。甘えることを覚えると、かわいいなと思ったりすることもふえるし、こんなこともできるのだと思ったりすることもふえる。そういううれしさというのは、健常の子とほとんどかわらないのだと思うようになってしまったわけです。その中で、「この何年間が消えてしまったら、大事なとおしい時間も消える。この子がいきなり健常な子になってしまうということは、そういうことだ」と思うようになって、「ああ、この子はこれでいいのかな」と…。

それは、翻って言えば、「この子はこういう個性だよ」ということだったのです。回り回ってそうだったというだけで、すごく時間がかかっているわけです。10年近くかかっているかもしれません。それでやっと今、僕は、「うちの子はこういう個性なので、申しわけない。障害があつてね」と言えるようにはなっていますが、やはり小さいころは無理でした。受け

とめられませんでした。

そういう親に、植松的な、悪魔的な言葉が…。「この子がいなくなれば、あなたはもっと幸せなんじゃないんですか？」と、彼はそういう問いかけをしてきたわけです。僕がこの文章を書いたのは、そういう経緯です。「私はこう思っていたけれど、長々かかったけれど、今はこう思っている。うちの子は、この子でいいんだ。うちの子は、これでいいんだ」という文章を書いたのです。だからカウンターとしてのメッセージとして、社会が受けとめたということだろうと思います。別にそんなことを意識したわけではなく、とにかく我慢できなくなったから書いただけなのですが、どんどんシェアが始まって、優秀な出版社の編集者の目にとまってしまいまして、無理やり「書け」と言われて、何とか書き上げたのが3年近く前です。

その後、ちょっと信じられないことがいっぱい起こりました。例えば、僕が書いた文章に歌をつけてくれた歌手の方がいらっしゃいます。僕がこれを書いたのは、詩を書いたつもりはなかったのですが、詩だとよく言われていて…。「僕は、詩なんて書けないんですけどね」と、その歌手の方と酒を飲んでいて言ったら、「心からの叫びは詩ですよ」と彼が言ったのです。飲んでいたので、「だったら、これに曲をつけたら歌になるのですか？」と言ったら、「それはなりますよ」と。「やってくださいよ」と言ったら、その人は約束を守って本当に3カ月後に歌にしてくれたのです。僕は半分忘れていたのですけれど、ちゃんとやってくれました。

その歌は、一言一句削らずにできているのです。びっくりしまして、これは何かできないかなと思いました。これは、記者ではなくてプライベートのことなので、YouTube にこれをアップするとしたらどうしたらいいかなと考えて…。障害のある子の、「この子はうちの家族です。いとおいしいのです」という写真を募集して、スライドショーにしてみようと思いついて募集したのです。「いとおいしいという気持ちが込められた写真をください。小さいころのものでもいいです。そしてもう1枚、この1年に撮った写真をください。2枚セットでください」ということを書いて、Facebook に投稿しました。

「締め切りは、2017 年の7月 26 日です」と書きました。みんなわかったみたいです。事件から1年なのです。事件から1年の締め切りに、“うちの子はかわいいんだ”という写真をくれと僕が言ったのです。みんなは、意味がわかったのです。「ネット上で公開してもいいという写真をください。愛称をつけてください。名前でもいいですが、ファーストネームもしくはニックネームをつけてください」と…。60 何人の人が寄せてくれました。それをスライドショーにして、「うちの子には、名前も顔もあるのです」というメッセージにしたわけです。それを YouTube で公開しました。それはここに出ているので、あとで見てもらえたらと思います。

出版社の編集者がつけてくれた『障害を持つ息子へ』というタイトルが、いつの間にか僕が表現するすべてのもののタイトルになってしまいまして、これも『障害を持つ息子へ』というタイトルで YouTube に挙げました。

〈『障害を持つ息子へ』の曲が流れる〉

○神戸 このあと、一人一人の写真が出てきて、名前が出て…。「ケメ子ちゃんは、今こういう子になっています。27 歳です」「大ちゃんは、こんな子でした。今は5歳になっています」…。こういうものです。これが9分ぐらいの VTR になっているので、見てもらえたらと思うのですが、これは“私”としてやったものです。

つくってしまったのですが、これを何かできないかなと思って、TBS のラジオの仲間と話をしていて、「この曲8分半あるんだけど、ラジオで流せないかな」と言ったら、「神戸さん。だったら、この歌以外にヤマがあと二つ三つあったら、1時間できますよ。特番つくりませんか？」と。「えっ、ドキュメンタリーの特番？」と言ったら、「そうそう、年末だったら1時間ぐらい空けられると思うので、企画書を書いてくれませんか」と言われて、「わかった」と言って書き始めて、放送したものが、ラジオのドキュメンタリーにつながっていきます。

Facebook という極めて個人的な文章が『news23』になり、そのあと個人的な本になり、そして歌になって YouTube になり、そして今度は逆にラジオ番組になりという——仕事と私の間を行ったり来たり、行ったり来たりしながら、この3年間やってきた感じです。

この結果、3月に TBS ラジオと共同制作で1時間のラジオ番組をつくりました。それが『SCRATCH』というタイトルで、『差別と平成』というサブタイトルがついています。これは、検索していただくと TBS ラジオの「ラジオクラウド」というのがあるのです。メールアドレスを登録するだけで使えるのですが、ただです。それで公開しています。「ラジオクラウド」で、『差別と平成』で検索すれば出てきます。メインタイトルはアルファベットで『SCRATCH』とありますが、SCRATCH というのは、よくコンビニとかでもらう、ガリガリガリと削ったら下に数字が出てきて、当たりかどうかわかるスクラッチカードです。SCRATCH というのはガリガリと線を引くという意味があるのです。

その番組をつくる時に思ったのは——。植松は線を引いて、この向こうの人間は生きている資格がないと彼は決めたわけです。同じように在日の人に線を引いて、おまえたちは日本から出て行けと言う人もいます。同じように、LGBT の人たちは生産性がないと言う人もいますよね。おまえたちは生産性がないと…。人と人の間に勝手に線を引いて、向こうの人の人権を認めない行為が日本にすごく広まっているんじゃないかとズーッと僕は思っていたので、企画書のタイトルを「線を引く人たち」と書いたのです。そうしたら、TBS ラジオの一緒にやっている仲間が、「英語だと SCRATCH ですね」と。「SCRATCH が、タイトルにいいんじゃないですか」と言われて、「カッコいいね、SCRATCH か」と思って、それをラジオ番組のタイトルにしました。

人と人の間に線を引いて、向こうの人の人権を認めない。植松聖という男は、「心失者」という言葉をよく使うのですが、「心を失った者。名前と年齢と住所の言えない人が心失者だ」と、私に彼は説明しましたが、「そんな簡単な基準だったら、うちの子なんかはしゃ

べれないので、殺害の対象なんですか？」と聞いたら、「いや、そのときになってみないとわからない」と彼は言っていました。でも彼と面会をする中で、明らかにうちの子がいたら刺されていただろうと思うようになりました。

○ゆき 資料のこれが、彼の思う「心失者」という少年の顔です。

○神戸 ブルーのコピーの3枚目ぐらいの所に、白黒で、ヘッドギアをして、よだれを垂らしている人がいると思うのですが、これは、彼が手紙の中に書いて入れてきた「心失者」の絵です。手紙の中には、「やまゆり園はいい職場でしたし、ずっとんきょうな子供の心失者を見ると笑わせてくれます。子供が可愛いのは当然です。ですが、人間として70年養うためには、どれだけの金・人手・物資が奪われているか考え、心失者の面倒を見ている場合ではありません」と書いてきました。そして、うちの長男のことを——本も送ったので知っているわけですが——その下にあるように、「いつまで生かしておくつもりなのでしょうか」という手紙を僕に寄せてきたのです。

こんな男と会って、何か意味があるのかと思いました。一応、僕から記者として面会を申し入れたわけなので、会う以外の選択肢はないと思いましたが、正直に言いますと心が壊れるかもしれないと思っていました。46人を殺傷した男から、目の前で私の子供に向けてこういう刺すような言葉を聞いたとき、自分自身は耐えられるだろうかという恐怖感も持っていました。でも、会いませんかという手紙を書いたのは私ですから、これは仕方がない、避けるわけにはいかないと、会いに行ったのが最初でした。

ところが彼は、極めて普通の人だったのです。僕は精神障害や発達障害のプロではないので、診断はできないのですが、日常のコミュニケーションを取るに当たっては何の不自由もないだろうと…つまり、普通の人に思えました。そして、やり取りもきちんとできるので、想像力の障害も感じませんでした。

ただ、自分のことを不細工だと何度も言っていたのが非常に印象的でした。「僕は不細工ですから」と言うから、「いや、そんなことはないですよ」と言ったら、「いやいや、整形したから何とかなっているんです。整形して、やっとここまで来たんです」と言うのです。「何というか、そんな気にすることじゃないと思うんだけど」と言ったら、「いや、不細工は不細工でなくなるために努力をすべきなのです」と、自分のことを言ったのです。あとで考えると、不細工とイケメンの間がない。真ん中がなくて、自分は不細工であると…。

それから彼がいつも言うのは、「社会にとって役に立っているか、立っていないか」ということをよく言うわけですから、それで、「心失者は社会の役に立っていないから殺害したんだ。それに気づいてしまったから殺害したんだ」という言い方をします。「何であなたが線を引き資格があるんですか。ここから向こうの人に死ねと言え資格があるんですか。あなたは神ですか？」と聞いたら、「そんなこと言っていないよ。落とし物を見たら拾うじゃないですか、交番へ届けるじゃないですか。それと同じです」と言いました。当たり前のことを

当り前にしただけですという意味だと思いますが…。何でそんなことを考えたのかと何度聞いても、「気づいたのです」という言い方をしています。

ちなみに、ヒトラーには影響を受けていません。ヒトラーのことは知らなかったです。ヒトラーが障害者を殺傷したという事実さえ彼は知らずに、「この人たちは殺したほうがいいんじゃないの？」という話を同僚にしたときに、「それじゃあヒトラーだろう」と言われて、「えっ、ヒトラーってそういうことをしたのか」と言っていました。むしろ逆に、「トランプだ」と言っていました。「トランプは、人が心の中で、本音では思っているけれど言えないことをはっきり言った人である。それを政策として実現しようとしています。これはすごい」と、トランプのことは絶賛していました。

「障害者なんか、いなくなったらいいのではないかと、彼はふと思ったわけです。そして、「世の中の人、内心ではみんなそう思っているのではないかと」思った。だれしも、心の中には内なる優生思想みたいなもの、差別の心がない人はいないわけです。それを一定程度覆い隠し、出してはいけないと自制もし、出たら恥ずかしいし、失礼だし、自分自身も嫌だし…。つまり、まずいことだと思っているから出さないわけですが、あること自体は否定できないかもしれません。でも彼は、みんなが思っていることを出せないのは建前であり、出せる社会にしたほうがいいのではないかと考えた。だから殺傷したのです。

そして彼は、それによって社会から褒められると思っていた。罪に問われるとは思っていませんでした。これがちょっと驚きなのですから…。ここをもって妄想癖があるということで、精神障害の臭いを感じる専門家はいらっしやいます。しかし、そう認定されるかどうかはわからないし、多分されないだろうと思うのです。責任能力があるかないかと言われたら、はっきり僕はあると思う。コミュニケーションもできます。

そんな面会をした結果をラジオでやったものを、『news23』から、「ラジオを映像化できないか？」と聞かれたのです。「ムービーで撮っていたのがいっぱいあるから、できますよ」と言って、ラジオをベースにつくったのが、今からお見せしようと思っている『news23』の映像です。これは5月6日に、TBS『news23』で放送したもので、今でもここに出ていますので、見ることができます。ちょっと見てみましょうか。

〈映像開始〉

○ナレーション(女性) 神奈川県相模原市の障害者施設で3年前、19人が殺害され27人が重軽傷を負う事件がありました。逮捕されたのは、この施設の職員だった植松聖被告。今も事件を正当化しているという植松被告ですが、その植松被告と面会を重ねている人物がいます。二人の対話から何が見えるのか、戦後最悪とされる事件の、その奥を探りました。

神戸金史さん、福岡のテレビ局の記者です。息子は重い障害があります。その神戸記者のもとに1通の手紙が届きました。

○植松のナレーション 殺すべきものがいれば、殺す。いつまで生かしておくつもりなのでしょうか？

○(映像)神戸 ソツとしましたよね。気持ち悪くなったというか…。

○ナレーション(女性) この手紙の送り主は…

○ニュース記者(男性) 元職員の26歳の男が刃物で入所者を刺し、19人が死亡しました。25人が重軽傷です。

○ナレーション(女性) 植松聖被告。2016年、神奈川県相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」で起きた連続殺傷事件で逮捕されました。

○ニュース記者(男性) 植松容疑者は、車内ではニヤニヤとしています。

○ナレーション(女性) 施設の前職員だった植松被告は、未明に窓ガラスを割って侵入。入所者19人を殺害、27人に重軽傷を負わせたのです。なぜ、障害者ばかりを狙ったのか。

事件の翌年、神戸記者は植松被告に当てて手紙を書きました。その10日後、返事が届いたのです。

○植松のナレーション お手紙をいただきまして、まことにありがとうございます。やまゆり園はいい職場でしたし、すっとんきょうな子供の心失者をみると、笑わせてくれます。ですが、人間として70年養うためには、どれだけの金と人手、物資が奪われているか考え、泥水をすすり飲み死んでいく子供を思えば、心失者のめんどろを見ている場合ではありません。

○ナレーション(女性) 「心失者」——これは植松被告が見つけた言葉です。

○(映像)神戸 これが一緒に入っていました。「心失者」の絵だそうです。

○ナレーション(女性) 障害者や認知症の人など、意思疎通が取れない人のことを指しているのだといいます。

○植松のナレーション 重い障害を持っている子の親に、こんな話はだれもしたくはありません

せん。もちろん自分の子供が可愛いのは当然かもしれませんが、いつまで生かしておくつもりなのでしょうか。

○(映像)神戸 いきなり、自分の家族と子供も含めて、刃を突きつけられたような気分になって、どう受けとめたらいいかわからなかったです。

○ナレーション(女性) みずからに突きつけられた刃——。神戸記者の長男・カネスケさん。重度の自閉症と知的障害があります。自分の息子も、植松被告にとっては殺害する対象だったのか？ おとし12月、神戸記者は植松被告と横浜拘置支所で初めて面会しました。

○植松のナレーション 御足労ありがとうございます。

○ナレーション(女性) 手紙から想像していたよりも声はか細く、丁寧な言葉使い。まず最初に、神戸記者はこう尋ねました。

○(映像)神戸 あなたは、意思疎通ができない人のことを、心を失っている人・「心失者」と呼んでいます。具体的にどういう人を指して言っているのですか？

○植松のナレーション 名前と年齢と住所を言えない人です。

○(映像)神戸 事件の当日は真夜中で、みんな寝ていたでしょう。どうやって「心失者」かどうかを見分けたのですか？

○植松のナレーション 起こしました。「おはようございます」と答えられた人は刺していません。

○(映像)神戸 では、うちの子が、もし「やまゆり園」に入所していたとしたら、殺す対象だったということですか？

○植松のナレーション そのときになってみないと、わからないですね。

○(映像)神戸 生と死をつかさどるのは、神のやることなんじゃないですか？ あなたは神なのですか？

○植松のナレーション そんなことは言っていません。みんなが、もっとしっかり考えるべ

きなのです。考えないからやったのです。

○(映像)神戸 あなたは、一線を引いたのですか？

○植松のナレーション そうです。

○(映像)神戸 どうしてあなたに、線を引く権利があるのですか？

○植松のナレーション じゃあ、だれが決めればいいんですか？ 気づいてしまったんだから。落し物を拾ったら届ける、当たり前ですよ。それと同じような感覚ですよ。

○ナレーション(女性) 30分の面会が終わりました。

○(映像)神戸 率直な印象を言うと、かなり浅はかだなと思いました。すごく薄っぺらい知識で、重大なことを判断してしまっている。

○ナレーション(女性) そのころ長男のカナスケさんは、二十歳の誕生日を前に、ある計画を実現させようとしていました。ずっと前から欲しかったスマートフォンを、買いにやってきたのです。お金を丁寧に並べ始めたカナスケさん。福祉事業所で働き、1年間大事に貯めてきたお金です。12万1,698円。機種代金とサービス料金を事前に計算し、1円単位までピッタリ用意していたのです。カナスケさんは、カナスケさんのスピードで日々成長していました。

ことし2月、神戸記者は植松被告との6回目の面会に望みました。

○植松のナレーション 身内に障害者がいる人は、正常な判断ができないのです。そろそろ現実を見ましょうよ。僕の考えが正しいかどうか。

○(映像)神戸 それは福祉のことを言っているんですよね。でも、あなたの生活も今、人のお金で賄われているのではないですか？

○植松のナレーション 外に出してくれれば、働きますよ。いい加減、考えましょうよ、みんな。日本の現実を見たら、それどころじゃない。

○ナレーション(女性) 別の日、神戸記者は胸に抱いてきた疑問をぶつけました。

○(映像)神戸 あなたは、役に立つ人と立たない人との間に線を引いて、人間を分けて

考えているようですね。もしかするとあなたは、自分は役に立たない人間だと思っていたのではないですか？

○植松のナレーション たいして存在価値がない人間だと思っています。

○(映像)神戸 もしかするとあなたは、事件を起こしたことで、自分が役に立つ人間の側になったと考えているのではないですか？

○植松のナレーション 少しは役に立つ人間になったと思います。

○ナレーション(女性) 役に立つ人間、役に立たない人間。これらの考えの背景にあるものは一体何なのか。

神戸記者とともに、植松被告と面会した人物がいます。牧師の奥田知志さんです。

○(映像)奥田 彼は余り役に立っていなかったと…。つまり、彼自身も存在の危機の中に生きていたんじゃないですかね。

○ナレーション(女性) 30年以上、ホームレスの支援を続けてきた奥田さん。

○(映像)奥田 ホームレスというと、だらしないとか、働く気がないとか、みんなそういうふうにいるけれども、「助けてと言えない、人に迷惑をかけたらだめ」というプレッシャーの中で、人によくも悪くも依存できなかったという人が、その末、あげくの果てにホームレスになっているということが、決して少なくないですね。

○ナレーション(女性) 実は、植松被告は事件前に、生活保護を受けていたことがわかっています。奥田さんは、植松被告が、「自分は役に立たない人間ではない」ということを証明するために事件を起こしたのではないかと考えています。

○(映像)奥田 社会保障費を使っている人はだめな人だという、そういうふうなプレッシャーはすごくあって、意味のない命を殺すことこそがこの社会のためになるのだという、そういう主張。それを果たすことによって、彼自身が、「僕、役に立つよ。僕、生きている意味があるよ」と…。承認欲求というか、あるいは生産性の証明というか、何かそういう時代の圧力の中で、彼自身もあのことを選択したのではないかな。

○ナレーション(女性) さらに、こう警鐘を鳴らします。

○(映像)奥田 ホームレスや困窮者、在日外国人…さまざまな人たちに対して、非情に分断ラインが引かれていくという中で、役に立たない人間は排除しろと。昨今で言うと、生産性の低い人間は意味がないのだという——それは、彼の言葉ではなくて、時代の言葉として語られてきたことなのです。その論理が通用するのだったら、障害者だけではないですよ。当然、高齢者にも向くだろうし、今、問題になっている、引きこもりをどうするのという話にもなるだろうし…。ですから、この事件というのは、今、ここで本当にみんなが考えないと、とんでもないことになると思うのです。

〈映像終了〉

○神戸 こんな感じです。今まで僕がお話してきたように、線を引いて向こう側の人を一方的に差別する。そこに尊厳や人権や、もしかしたら存在さえも認めないような発想を持つ人というのが、少しずつ今の社会にふえているような気がしています。こういうことに対して、どういうふうに考えるかということを、今回のラジオ番組、それからこの『news23』含めてのメッセージとして、今回報じたわけです。

全部はお見せしませんけれど、最後に私が、「植松的な考え方を許してしまうと、今後私たちの社会は、心を失った社会に——彼が言うような「心失者」とは逆に、社会自体が心を失ってしまうんじゃないですか」ということを、このスタジオで言っています。そういう社会にしないために、自分たちの子供たちが生きる社会をそうしないためには、こういった言葉に対して、「やったことは悪いけれど、考え方はまあわかるよね」という感覚を持たせないようにしていかなければいけないだろうと思います。

植松と話をしていて何度も、「あなたは、もしかしたらこう考えたのではないか？」という、非常に辛い作業をしたのです。想像しながら、「もしかしたら、こう考えてあれをやったのかな？」とか、いろんなことを考えたのですが、そのうちの 하나가、「親御さんのためにやったんじゃないの？」ということでした。彼は「そうだ」と、はっきり言っていました。そのときに、「泣いている親御さんを見たからだ」と言っていたのですが、じゃあ、その親御さんと話をしたかという、していないのです。子供がパニックになって泣いている親御さんを見て、勝手に、「ああ、この人はこの子がいなくなったら、泣かなくてすむのにと思った」と…。「じゃあ、そのお母さんとそういう話をしましたか？」と聞くと、「していない」と言う。

どんな子供だって、親が泣くことってあるじゃないですか。悔しくて泣いたり、怒って泣いたり、悲しくて泣いたり…。それをもって、その子はいなくていいと決めることはできないですよ。だって、それ以外の喜びのある場合だってあるわけだし。私もいろいろ言ったように、甘えてくれる子供の存在を感じたときに、「ああ、すごい」と思っているわけですよ。そういう障害のある子であっても、そういうことはいっぱい起きているわけです。それをなぜ他人が、「この人のために、この子はいないほうがいい」と決められるのか——。そこには、対話はないのです。質問もやり取りもないのです。

そしてもう一つ聞いたのは、「社会にとって役に立つ・立たないと、あなたは二つに分けて考えるけれど、意思疎通ができないという意味で言ったら、認知症になった高齢者もそうよね。高齢者も意思疎通ができなくなったら、心失者なんですよ？」と聞いたら、「そうです」と。「ということは、意思疎通ができなくなったら殺害したほうがいいってこと？」と言ったら、「そうです」と…。つまり彼は、障害者差別で殺害したのではなくて、「社会のお荷物になっている人」と彼が断定した者を殺害したのです。その延長線上では——彼はまだしていませんが——高齢になって、うまく意思疎通ができなくなって、寝たきりになった私たちも、殺害の対象であると彼は言っているわけです。自分自身もそうだと言っています。

「糞尿を垂れ流しながら寝たきりになって、生きていたくないでしょう？」と、彼は僕に何度も聞いたのです。それは普通そう思いますけれど、僕は、人間というのは結構業が深いものだと思います。「ほとんど意思疎通できないから、この酸素を外しますか？ 御家族はどう思いますか？」と聞かれて、「そうですね。もう限界ですかね」というときに、もし聴覚が生きていたら、「やめてくれ、やめてくれ、やめてくれ」と、僕は多分思うのです。人間というのは、業が深いと思うのです。そんなに簡単ではない、簡単に死ねないと思います。

だけど彼は、役に立っていなかったら、きちんと線を引いて、「存在させるな」と言っているわけです。それは、「自分もそうだから」と言いますから、ほかの人たちもみんな、ここにいる人たちも私も、「役に立たなくなって、意思疎通ができなくなったら、もう殺しなさい」と、彼ははっきりそう言っているわけです。障害者差別ではないです。役に立つか立たないかの問題なのです。

この事件は、「生産性」とか、「役に立つ」とか「立たない」とか、いろいろな言葉がネットを中心にして社会に広がっていく中で、それに対して耐性がなくなって、「それほど悪いことじゃないのではないか」と思ってしまう人が、若干でもふえているということの延長線上にある事件だろうと思っています。一方で、僕の書いた文章がパツと広まって行くように、それに対してストップをかけたいと思っている人もいっぱいいるのです。多分、そのせめぎ合いが今、この社会で行われているのだろうと思います。「彼の言っていることもわかるんだよね」と、安直に言っている人がいたら、「それは違う」という話を一人一人がしていくのも、多分とても大事かなと思います。

ネット上でそのままになっていくと、それは増殖します。これは、実際の人口以上に 10 倍・100 倍というぐらい多く見えてくるのです。多く見えると、それなりの存在感をもって見えるのですが、実際にしゃべっている人はすごく少ないです。人口の数パーセントと言われています。多分、ヘイトスピーチなどをやっている差別主義者の人たちも、そういうレベルの数字なのに、「こういう人もいれば、そういう人もいる」と相対化されてしまうぐらいの存在のように、ネット上は見えています。だから僕らメディアにいても、相対論ではやれない。「だめなものは、だめだ」と僕は思っているので、植松に賛成する人の意見をここで取

り上げるようなことは、必要ないと思っているわけです。

そういった報道を、僕は報道としてやってきましたが、父親としては YouTube をつくってみたりして…。行ったり来たり、行ったり来たりしながら、公私がうまく分けられないまま、この3年間で過ごしてきたと…。そんな感じでやってまいりました。

それをゆき先生に見つかって、目をつけられて、しゃべれと言われて、きょう来た次第です。すいません、ありがとうございました。

○ゆき 発見してしまいました。どうぞ、質問のある方は——。だれでも結構です。

○女性A ありがとうございました。

御子息は、あの YouTube のような画像はごらんになりますか？ もし、ごらんになっているとしたら、そういうものを見てどんなふうに反応されているのかなと思ひまして…。

○神戸 YouTube というのは、さっきの歌のほう？

○女性A はい、そうです。

○神戸 見ていましたね。そうですね、20歳になって少し照れを覚えてきたみたいな気がします。今までは、自分が飛び出していくのを見ると、飛び出してはダメだということで「バツ」と言っていたのです。過去の自分を見て、言うのです。そのとき僕らは、ゲラゲラ笑っていたのです。YouTube は見ていたのですけれど、大人っぽくなった自分が映っているのは照れくさいみたいです。前はしょっちゅう、うちの子は再生していたのです。飛び出しているシーンを何回も見ては、喜んで笑っていたのですが、そういうのはなくなってきた感じなので、少しは大人になっているのでしょうか。

たまに見ているかと言われるとわからないのですが、少なくとも『news23』を見て意味がわかるわけではないので(余り見てほしくないですけど)——。でも、こういうのが見たいという感じは、今はないかな。ただ、Facebook で僕が投稿しているのは見えています。たまに「いいね」を押してくれます。カネスケは、LINE はしますが Facebook はしません。人が入ってきて友達申請したら、多分彼はOK するでしょう。その辺、ちょっととめるものがないのです。悪意を持った人が近づいてくると困るなと思っていて、Facebook に「いいね」するたびに、「今、“いいね”したけど、やめなさい」と、僕は LINE でよく言うのですが、そんな感じでやっています。

○ゆき 『news23』では、お金をピチッと並べたり、LINE を通じておしゃべりもできるので、軽いと思われたかもしれないけれど、6歳のころは本当に、お店に行ってあらゆるものを並べかえたり、お店の物を…。

○神戸 並べ直したり、触ったり、ちょっと手がつけられなくて…。

○ゆき 大変な…。こういう子を見たら、きっと植松は殺してしまいたいと思うような…。

○神戸 しゃべれないですからね、間違いなく刺したでしょうね。

○ゆき という少年が、あそこまでちゃんと成長して…。

○神戸 ただ、何かを考える概念——言葉でも、金銭感覚でも——それを入れるのは物すごく大変なのですが、入れれば使えるようになるのです。金銭感覚、お金という概念をどうやって持たせるか、これは結構大変でした。ただ、スーパーでお金を払わずに物を持ってきたときがあって、謝りに行って…。いっぱいカードを書いて、物を買う絵とか、お金を払う絵、おつりをもらう絵とかを全部書いて、妻がそれを見せながらやっていきました。私ではないですけど…。

○ゆき はい。どうぞ、ほかに、

○女性B すいません。今、出生前診断とか、そういったのが結構新聞なんかにも載っていて、ダウン症の子だとかという、あれがあるのですが…。そういう出生前診断とかで、子に差をつけると言ったらおかしいのですけれど、そういうのをどう思うか…。あと、世間的に「勝ち組」だとか「負け組」だとか、何かそういう言葉だけが先行していて、やっぱりそこで一線を引いているのかなと思ったのですけれど…。

○神戸 一線を引くというのは、僕の中でまだぼんやりしていて、もうちょっとクリアにしたいのですけれども…。やはり何か、差別感の根底にかかわっているような気がしていて、番組のタイトルとかにできています。もうちょっとクリアに描きたいのですけれど、だれの心の中にもそれはあるだろうと思います。障害があるより、ないほうがいいという感覚もあると思うのです。僕が、子供が生まれたときに指の数を数えたのも、そういうことだろうと思います。多分、冷静に障害があるかないかを把握しようとしたのではなくて、「ないことでホッとしようとした」という感覚に近いのかなと思います。

でも実際、僕は福祉の専門家でも何でもありませんし、そういう記者ではないのですが、この近年、特に東京に来てからやっていることは、相模原事件に影響されながらいろんな表現をしてきました。長男がいなければ、こんなことは起きていない。長男がいる父親であるという立場の記者だということが、今回のいろいろな表現につながっていると考えたときに、だれがいるから意味があるとか、いなければ意味がないとか、あるとかないとかで

はなくて、すごくいろんな感覚があって、いること自体でいいのではないかという気がしているのです。うまく言えないのですが、「そこにいただけでいいじゃないか」という気はしています。

出生前診断は、極めて倫理的な問題がかかわりあってくるので難しいと思います。96パーセントが中絶するというデータもありますが、あれは「診断を受けた人の中で」という数字です。受けない人のほうが、全然多いわけじゃないですか。だから、そういう数字が一人歩きして、「96パーセントだから、みんなそうなんだ」というふうになっていくのも怖いなと思います。実際に、「そのまま生まれてもかまわないよ」という人が、実は一定数いるのですよね。それが、96パーセントという言葉だけを聞くと、ほとんどいないのだと受け取ってしまうかもしれません。このあたりは、生き方の問題だろうと思います。

私自身が当時それを知っていて、そういうことをできる環境だったらどうしたかと言われたら、わかりません。していたかもしれないけれど、診断を受けて障害がダウン症だとわかったときに、産むという選択肢をしたかどうかを考えてしまうので、僕はしなかったような気がしているのです。そういう選択をせざるを得なくなる立場になりたくないからと思うからです。だから、人の生き方とか、ものの見方とかによるのだらうと思います。どちらがいいとか悪いとかは、これは極めて難しい問題だと思いますが、そうしないほうが僕の倫理観では大事かもしれないと、特に今、思うようになっています。

でも、自分の子供が結婚するときに、「おれは、する」というとき、「やめろ」と言うかどうかは、本当にこれは難しいし、わかりません。ただ次男坊に、言わなくてもわかるでしょうが、「障害のある子が生まれたからといって、イコール不幸ではない」とは言えるかなと思います。

○ゆき ありがとうございます。専門家が一人おられます。

○男性 神奈川県で障害者の仕事を40年間ぐらいしているので、相模原事件が起こったあとは、気持ちの中がずっとザワザワザワザワしています。

今、言われたように、私の気持ちの中にも、孫が生まれるときに五体満足であってほしいとか、ちゃんと成長しているかとか…。あるいは障害のある方と一緒に外に出るときに、できれば静かにしてもらいたいとか、やはり人の目を気にしている自分がいるのも事実です。あるいは、「この野郎」と…。これだけ面倒を見ているのに、何で逆らうのよ…みたいな気持ちを持つことも事実でした。

そういうザワザワザワとした感じがある中で、今回の事件が起こってしまったということなのですが、恐らく皆さん、それぞれ職員の中でもそういう状況に置かれることって多々あると思うのです。それをどうやって自分の中で折り合いをつけていくかということが、大事なのかなと思っているのです。

取材していて、私自身は、「彼は、やまゆり園の中でつくられたのだらう」という気がしな

いではないのです。ほかのところに行ったら、そういう行動をとっていたかなというような…。ほかであればもうちょっと、仲間との関係だとか、利用者との関係の中で、そこまでの行動を起こさなかった可能性もあるなと思うのです。彼の言った、「職員の姿だとか親の姿を見て、実行に及んだ。それで役に立てた」というような思い。あるいは職員の中で、「こういう人がいなければ。法がとめているから…」というように言った方もいるという話を聞くと、やはり環境自体の問題も多いと…。

こういう福祉関係の現場は、高齢系もそうですけれど、やはり現場にメスを入れていかないと…。自分たちで話したり、支え合うような環境をつくらないと、また彼みたいなことが起こる。実際に高齢者を突き落したり、いろんなことが起こっていますので、そういう意味では職員のケアというか、環境を大事にしていかないと、この問題というのはなかなか解決しないだろうなと思って…相変わらず、ザワザワ感が残っています。

○ゆき ありがとうございます。

○神戸 植松は明らかに、あの施設にいる間に気づいています。そして、それをしっかりとめる力は、だれも持っていませんでした。それから、植松が仕事について言っていたのですが、「すばらしい職場でした。何にもしなくていいのですもん。見ているだけですから」と…。僕は、福祉の入所施設は結構大変なのだろうと思っていたので、「大変だったでしょう?」と聞いたのですが、「いえいえ。見ているだけで、何にもしないでいいんですから。見ているだけです」と言うのです。それで済んでいた。職員がそうやっても済んでしまう施設というのは、多分何か問題があるのだろうと思います。

実際のところ、施設の中でどうやったかという取材を、僕は一つとしているわけではないのですが、少なくとも植松があ施設にいて、排除する思想を持ったのは間違いありませんし、楽であったと言ったのも間違いありません。意味があったとか、つらかったとか、そういう話は一切なく、楽でよかったと…。非常に浅薄な労働感を持っていました。

○ゆき 私も全く同じことを考えていました。同じ神奈川県にある「朋」は、重い障害を持っている人たちが、町へ出て行き、町の人たちがそれに慣れていきます。音楽会をやったりすると、それにみんなが拍手する。「何とかちゃん」と呼びかける。名前のない存在ではなくて…。同じ神奈川県で、朋はまちの中、やまゆり園は人里離れた所で…。

この写真を見ていただきたいのですが、ここに「やまゆり園」と東京の精神病院の、そっくりな写真が載っています。さっき、認知症になったらという話が出ましたけれども、今、精神病院には認知症の人がどんどん捨てられています。こういう施設ができたのは、今から 30 年も 40 年も前で、これができている時点でもう見捨てられている。「殺しはしないけれど、見えないところに行ってちょうだい」というのが、この二つの写真だと思います。人々の心が最近すさんできたのではなくて、かなり長いことすさんでるように思います…。

不妊手術受けさせられた人のことが問題になよっていますけれども、何十年もこういうことは人々の心の中にあり、それが政策になって、あんな遠い所にどんどん施設ができてしまった。

「植松がああなったのは、本当はあの施設のせいだ」という弁護をする話も出ているのですが、でも、あんな悪い植松の弁護をするのは、世間が許さないだろうという話もあつたりします。

植松が殺したのは「返事をしなかった」というのですが、あそこでは、面倒だから夜はたっぷり睡眠薬を飲ませる。だから返事をしなかったという、手抜きも行なわれていた。

でも、あの施設が悪いという世論は起きてこなくて、「あの植松が、植松が酷い」とか、「時代の風潮が」なのです。たつた今も、あつちこつちの人里離れた精神病院とか施設の中で、人生を殺されちゃった人がいるということも、皆様、考えておいていただきたいと思いますが。。。

○神戸 本当にそうですね。それが、ちょっと可視化されてきたのかなという気もしていて…。やはり、見えないところにおいておけば済んでいたという時代ではないだろうと思います。

でも、ここからすぐ近くの、南青山の児童施設に対する反対運動などを見ていると、「自分の子供は非行に走らない」と思っているのですよね。もしくは、「自分の子供は、その子供を虐待することはない」と思っているのですかね。反対運動をするというのは、何か強い一線を引いている姿ですよね。こういった分断、想像力の欠如というか——「自分の家族も自分も、いつそちら側に行ってもおかしくないんだ」と思わないと、ああいう隔離した施設みたいな線の引き方は、消えないのかなと思っています。

○ゆき 時間が来てしまいました。お話に聞きほれちゃっている写真係りさん、ちょっと写真を撮ってくださる？ 皆さんが感謝している写真を…。

では、皆さんからの盛大な拍手で、お礼を申し上げていただきたいと思います。ありがとうございました。このあと放課後がございますので、もっと話を聞きたい方はお残りください。本当にありがとうございました。